

平成 29 年度第 3 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 30 年 3 月 14 日)

- 1 開会 10 : 00
- 2 教育委員会あいさつ
- 3 議事

熊本市小中一貫教育の在り方について

○ 幼小連携教育モデル校，小中一貫教育モデル校の実践報告

- ・ 碩台小学校
- ・ 富合中学校

古賀座長	実践報告に対して，質問はあるか。
上野委員	夏の学習交流会について教えてほしい。
大窪委員	中学生が小学生へ勉強を教えている。3 日間ぐらいである。
上野委員	以前，北高から小学校に教えに来ていて好評だった。教える側も勉強になっていた。
大窪委員	教える側の子どもも勉強する。また，教師志望，保育士志望の生徒もあり，意味がある。
古賀座長	交流会で，小 3 と中 2 の組み合わせの理由は何か。
大窪委員	中 3 は自分の勉強が忙しいため，1 年生は他の交流があるために 2 年生を組み合わせたが，明確な理由はない。
古賀座長	中 2 は自尊心が落ち，小 3 はギャングエイジと言われる。小 3 と中 2 は意味のある組み合わせである。その積極的な意義をアピールしてもいいのではないか。教える側が答えをすぐに言わないようにするなど，学びのプロセスが大事である。
荒木委員	碩台小で，先生方の変容はあるか。富合中で，班編成で用いた評価は，誰がどういう規準で行っているのか。
古賀座長	富合中学校で「意図的な班編成」という説明があったがその点についてもう少し説明をお願いする。
志波委員	小学校の先生が幼稚園に参観に行った際の，幼稚園の先生方の接し方について学びが大きかった。「自ら動くように待つ・仕掛けをする。」など。

平成 29 年度第 3 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 30 年 3 月 14 日)

大窪委員	また、交流では、日ごろマイナスに見られがちな小学生が幼児に優しく接している姿を見て、新たな発見があり教師にとって大きな学びがあった。 「意図的な班編成」については、それぞれの得意分野をデータ化して班のメンバーが互いに補い合い、うまく機能するように教科ごとに班を編成している。人間関係にも配慮している。意図的な班編成について、職員が研修する時間が不足しているのが悩みである。時間的な問題で、十分研修できていないので、細かいアドバイスはできていない。ベースは校長から示し、後は先生方に任せた。ただ、人間関係には配慮してもらったので、どこかの班が遅れるということはない。「ラーニングピラミッド」で、教える側の子が伸びたという実績を見せることで、意義を理解し、納得してやってもらっている。卒業式も今年初めて欠席者数が 0 になった。以前は不登校が見られ、学力も厳しかったが、「教え合う」（そのために班を編成する）ことで学力も伸びた。
長尾委員	実際、すべての学校に下ろしていくとき、働き方改革も行われている中で、成果と負担感とでどう折り合いをつけるかが問題になる。実際の負担感、中核になる先生方の負担感はあると思うので、それ以外の先生方がそれを減らす工夫、例えば、「これをするとこうなる」など見通しを示すこと等、負担感軽減につながる手立てがあれば紹介してほしい。
志波委員	意義やよさなどメリットを伝えることではないか。子どもたちの変容を明確にすると、負担感が達成感になるのだと思う。 学校間の距離があると行き来が大変だが、近ければ、1 学期に互いに見合うことが大事である。夏休みに合同研修会をもつなど、日程を工夫するとよい。 一方、学校の特色を生かす取組も重要である。碩台小の特色は音楽である。その特色を生かして、「上級生になればこんなことができるようになるんだ」というように、あこがれる存在として示すことは無理なくできる。今やっている特色を最大限に生かすことでも、負担感は少しは少なくなる。
大窪委員	兼務教員が乗り入れ授業をするのにも、打合せの時間が課題である。距離があるため、行くのに 5 分以上はかかる。中学校の教員が小学校へ行くと、給食までに帰るのが難しい。しかし、週当たりの残業がそんなに増える印象はない。 中学校では「予習、授業、復習」のために、生活ノートで「起きる、勉

平成 29 年度第 3 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 30 年 3 月 14 日)

志波委員	強, 寝る」時間を固定するよう取り組んでいる。時間を確保しないといくら呼びかけても「絵に描いた餅」になる。高校でもこれが有効であることを小学校, 中学校で話す。中学校だけでやると大変だが, 小学校でやっておいてもらおうと中学校ではスムーズである。生活習慣など身につけやすい年齢があると考えている。規則正しい生活習慣は, 小学校の低学年で身に付けさせたい。 ホワイトボードの使い方も同じである。中学校の教員が小学校へ行くのは負担だが, 小学校でやっておいてもらう部分が増えるので, 指導が徹底して「帳消し」になる。ICT 機器の活用に関しても, 使わないと新学習指導要領の求める授業はできないと考えている。小中学校合同で勉強することで, 自分の学校だけで研修するより円滑に導入できる。 連携教育に関して, 核になる先生は必要と感じる。今回は 1 年担任と教務主任が中心だった。年間計画の資料で, 連絡会 1～9 までであるが 1 年担任が中心に行っていた。連絡会は, 子どもを帰した後の放課後などの時間を活用していた。本校には幼稚園経験者が 2 人おり, うち 1 人が核となってくれた。
------	--

○ 指導課より

- ・先進校視察報告
- ・質疑, 協議

古賀座長	質問はないか。
大窪委員	義務教育学校になると, 校長が 1 人で 2 人分やらないといけないならば, 大変になるのではないだろうか。小中一貫ということでも校長の推進力が必要なのに, 負担が大きくなるのでは。熊本はどうするか。
古賀座長	霧が丘学園のように, 准校長（副校長）を小学校の責任者のようにしてもいいのでは。一般的には校長, 副校長がそれぞれ小学校と中学校とを分担している。
事務局	視察した横浜市の学校では, 中学校がリーダーシップをとっていたようだ。目指す姿としてのゴールに近い方がリーダーシップを取った方がうまくいくという意見がある。役割分担がなされていても, 実質は小中一貫教育が推進されていた。
大窪委員	校長と副校長の両方が校長園長会に出ることになるのか。

平成 29 年度第 3 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 30 年 3 月 14 日)

事務局	高森東学園は中学部の実質的な校長の役割として副校長の存在があった。役割分担がなされているようだ。
大窪委員	独自で行われる校長会は、小中で別々にあることが多いので校長は結構学校を抜けることになる。学校が動き出すまでのマネジメントが大変になるだろう。
荒木委員	江南中校区は、小学校と中学校とが行き来できる環境にあるが、まだ情報交換は十分ではない。小学校は前向きな先生が多く、中学卒業時の姿を共有できているのはありがたい。 中学校からのイニシアチブがあった方がいいと思うが、人数的に中学校の先生は多くないので、「やれるところからやりながら」という姿勢でまとめていく方向で話をしている。幼稚園があるので「12年間」で取り組む方がいいという方向性も、小中で共通してもっている。情報交換が一番の課題である。
磯田委員	昨年度からモデル校の取組を見せてもらい、視察校も含め、今回、小中一貫教育の全体像や目的、意義が明らかになった。 スケジュールの走り出しのところで、先生方に目的や効果を下ろすところが非常に大事であるが、どういう形で下ろされるのか。校長からになるのか、研修会などで今回の取り組みを先生方に説明する形になるのか。スタートすれば進んで行くと思うので、走り出しのところが大切だと思う。
大窪委員	今後について先生方には、本校で取り組んでいるようなことを市内で進めて行く方向性であるということを話している。本校では来年度以降も継続して行く予定である。 今話題になっていることが、全国的にも課題にもなっている。小中一貫で何をするかは明らかになっているが、何のためにするのか明確ではないということ、先日の文科省からの視察の際にも話されていた。「どう意味づけ、価値付けをするか」について、小学校と中学校の校長、教務主任、研究部長で話した。現状を踏まえて方向を決めた上で先生方に話をした。全体を納得させるのには大きなエネルギーがいる。「そうだよね」と納得してもらうまでには1年以上かかる。実際は、今は誰も効果を疑う人いない。クロス処理などデータを示すことで理解を得られる。マネジメントは結局、校長がするしかなかった。富合は「して当たり前」の学校だが、ましてやゼロからやるとなると、誰が何をやるかをサポートしないと難し

平成 29 年度第 3 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 30 年 3 月 14 日)

事務局	いのではないか。 まずは、できる学校からやっていただきたい。そのため、来年度の研究指定は全て中学校区で指定している。そこで必要性を実感していただきたい。そのような学校に先陣を切っていただき、31年度からの小中一貫型につなげて行く予定である。その間、校長会でも「本市は、いろんな成果が出ている小中一貫教育を推進して行く。」ということ伝えていく。来年度は連携カリキュラムを各学校でつくっていただくことを昨年からお願ひしていたので、そのことも進めていただきたい。そのために、この場でいろんなご意見をいただきながら、来年1年間を大事に進めていく。PTAにもお話をしに伺いたい。
多賀委員	植木北校区は10年前、県の指定を受け、保育園も交えた取り組みを行ったが、カリキュラムはあまり活用されなかったようだ。5年前に熊本市の小中連携教育の指定を受けた時に見直しをしたが、PTA主体で進められていた。カリキュラムの内容的に「好き嫌いをなくす」など、家庭の協力も得ないとどうにもならない内容もあった。学校が荒れたことも要因かもしれないが、小さいころからの躰が大事ということで家庭を入れたという経緯がある。 やはり効果が見えないと本気で取り組めないと感じる。作成した「幼小連携カリキュラム」を全家庭に配付しようと思ったが、予算に余裕がなく、断念した。できれば家庭にも配付したいと思う。
長尾委員	30年度のスケジュールで検討委員会を開催する計画があるが、モデル校以外での加配希望や校長の兼務の問題もあるので、8～12月に検討委員会を入れ、モデル校の中間的な発表があった方がよい。第何回目の校長園長会にどんなことを呼びかけるか、何を連絡するかも含めてリストアップしておくとういと思う。
荒木委員	今年度のまとめの校内研修で今年度の反省をして、次年度、どう連携を組むか、テーマは何にするかなど、中学校に相談に行った。 今後は、担当窓口の位置づけを行っていきたい。土台ができていいるモデル校も多いかと思うが、これから内容的にもどう進めるかが課題である。
古賀座長	これからの方向に関して、2点話をする。 1点目は、家庭の役割の話である。 本市は「徳知体」で「徳」が最初に来る。市版カリキュラムも一番に「挨

平成 29 年度第 3 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 30 年 3 月 14 日)

事務局	撈」があり、「地域の一員として」から始まっている。カリキュラムのつくりとして、「知・体」の前に「徳」の部分としての家庭、地域の役割を学校の実情に合わせて落とし込み、総合して「学校では」というつくりが可能と考える。 2 点目は一貫教育、連携教育における教員の資質向上についてである。実は、小中一貫教育の推進においては「小学校教育の専門性」の確立、「小学校教員の専門的な資質・能力」の向上が一番期待されている。 幼稚園は新システムへの移行に向けて、5 年間、生き残りをかけて幼稚園教育の専門性を高めてきた。中学校教育には「教科の専門性」がある。幼稚園等との連携、中学校との一貫の取組みの中で一番の成果は、小学校にとって、自らの専門性に係る資質・能力を向上させられることである。本市は小学校区がベースとなって地域や各種団体とつながっている。小中一貫教育は、小学校の教員が自分の専門性について考えるきっかけとなる。本日の、2 つのモデル校の実践報告は、まさにそのことを成果と課題とするものであったと思う。 年度が変わり異動等があるかもしれないが、今後とも協力をお願いします。 これにて閉会をする。
-----	---